

彩りのある彼女に最高
な日々を

ギスカン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生2年生の宮村優太。

彼には彼女がいる。それは丸山彩。優太は彩を幸せにしてあげたい。でもどうやったら幸せになるか分からない。そんな優太が全力で彼女を幸せにする。

目次

1話	彼女	—	1
2話	学校の2人の姿	—	7
3話	言いたいこと	—	15
4話	水族館デート	前編	20
5話	水族館デート	後編	27

1話 彼女

《big》第1話 彼女 《big》

僕の名前は宮村優太。高校生2年生。誕生日は11月30日。僕には大切な人がいるそれは……

「優太くん！」ギュー♡

「彩。どうしたの？」

「優太君がいたから抱きついたので♡」ギュー♡

そう、大切な人とは、同じ年で彼女の丸山彩。アイドルバンドのPastel*Palettesっていうアイドルのリーダーでボーカルをしている。彩は僕の本当に大好きな子です。僕も彩のこと大好きだけども。

でも僕は彩を幸せにできるか心配である。なぜかという僕は涙脆い。彩も涙脆いがそれ以上だ。あと僕はよくお節介をしてしまう。例えば千聖さんのドラマの台本の手伝いをしようと思っただら余計なことをしてしまうのだ。そんな僕でも幸せにいます。

「優太君今日はどこに行くの？」

「今日はどこにも行かないよ。今日はずっと家にいるよ。」

「そうなんだね♪」

「あと今日2人とも仕事ないからとても暇。」

そう優太はパスパレと同じ事務所に所属している。事務所での先輩である千聖に色々アドバイスを教えてもらってるのだ。

「彩、仕事は大丈夫？」

「大丈夫だよ！……って言っても失敗するけどね……」

「例えば？」

「例えば……途中で嘔んだり、トチったり……」

そう、彩は嘔んだり、トチったり、アドリブに弱い女の子です。……本当に可愛いよね。

「大丈夫。それが彩の魅力でもあるから。」ヨシヨシ

「優太君……／＼／＼」

彩は多分僕のナデナデが好きなんだと思う。だっていつも撫でたらいつも可愛い可愛い笑顔。僕に見せてくれるもん。本当に可愛いんだけど。彩は誰にも渡さないからな？

「あとパスパレの方はどうなの？」

「パスパレの方は……順調だよ。」

「そっか。前のライブもよかったみたいだね。」

「うん！ ……MCはアレだったけどね……」

「なんとなく予想はできるよ。日菜が笑うんでしょ？」

「うん……もうそれが当たり前になってきた感じかな。」

彩は本番に弱いタイプだからね。なんでもすぐにできる日菜は本当になんでもすぐに成功するから失敗した姿なんて見たことないよ。てか本当になんでもすぐにできるから本人も「つまんなあ〜い。」とか言ってるぐらいだからね。

「フアンの人達もすっごく楽しそうだったよ！」

「そうなんだね。」

パスパレはデビューライブで口パク当て振りをして演奏が止まり口パク当て振りがバレ、パスパレは炎上した。それでも彩は諦めなかった。彩が諦めなかったおかげで今のパスパレがあるのです。

「デビューライブさ、辛かったんだよな？」

「う、うん……すっごく辛かった。でも、私は諦めなかった。だって夢だったアイドルにようやくなれたんだ。そのチャンスが無駄にしたくなかったの。」

「彩……」

「優太君、『努力すれば夢は叶う。』これね私の好きなグループ『marmalade』の言葉なんだよ。」

「そうだったんだね……」

「優太君が何かに諦めてる時に使おうと思ったけど今いいかなって。」

「彩……お前は本当に偉いな。」ナデナデ

「優太君……／＼／」

「彩は本当によく頑張る。何があっても絶対諦めなくて逃げないでめげない。諦める彩の姿なんて見たことない。彩、ずっと僕の傍にいな。」ナデナデ

「優太君……／＼／うん！私も優太君の傍にいるよ！」

「ああ。よろしくな彩。」

「こちらこそよろしくね優太君！」

僕は彩のことを大切にしていきたい。絶対彩を守り抜く。

「彩、何か辛いことがあったらなんでも僕に相談してもいいんだよ。」

「分かった！」

僕は彩を泣かせたくない。いやだって彩の彼氏だし？僕が彩を泣かせたら絶対ダメでしょ。

言い忘れてたが僕と彩はまだ一緒に暮らしてない。だって高校生だもん。付き合っ

てはいるけど。

ブーツ ブーツ

「ん？電話？」

優太のスマホからだった。見てみるとそこには『白鷺千聖』と書いてあった。

「もしもし千聖さん？」

『もしもし優太さん。夜分にすみません。』

「いえいえこちらは大丈夫ですよ。それでどうしましたか？」

『彩ちゃんがどんな様子か確認してきました。』

「なるほど。別に普通ですよ。」

『ならよかったです。あと彩ちゃんに変わってくれるけしら？』

「はい、分かりました。」

と優太は彩に変わった

「もしもし千聖ちゃん？どうしたの？」

『もしもし彩ちゃん？突然だけど勉強は進んでるの？』

「う……」

『はあ……言ったわよね？コツコツするって全くあなたって人は……』

「ごめんね千聖ちゃん……」

『全くもうテストも近いのよ？それなのに優太さんと一緒に居て……一緒にいることは悪くないわよ。でも勉強もしないといけないのよ？あと優太さんもね。』

「はい……」

『2人とも、一緒に居ていいからちゃんと勉強もしなさいよ。分かった？』

「はい。分かりました。」

『それじゃあまた明日ね彩ちゃん。』

千聖との通話は切れた

僕達2人は勉強が苦手である。

「……彩、勉強しよっか。」

「う、うん！」

それから僕と彩は勉強しました。

これが僕と彩の日常。まだ結婚もしてないのにこれから先どうなるかなあ……自分でも心配。まあ彩がいるだけで僕は幸せだけどさ。そんなこんなで僕と彩はこんな風に一緒にいます。

2話 学校の2人の姿

次の日

「ん？ もう朝か。」

昨日彩とバイバイしてすぐ寝た

「ん？ 彩からメールが来てる」

そこに書いてあったのは

『優太君、テストも近いから先に行くね。ごめんね。でも変える時は一緒に帰ろ♪あ、そうだ♪今日優太君に言いたいことがあるから、楽しみにしててね♪』

「……なるほどね。よし。『分かった。楽しみにしてるね。』っと。」

僕は彩に返信を返した。

「言いたいことか……彩から言うのって珍しいな。なんだろう。」

僕は疑問になりながらも学校の準備をした。

僕のお母さんとお父さんは旅行に行っている。あと僕は一人っ子。兄弟はいない。だから正直に言う、寂しい。

「全くお母さんとお父さんはなぜ僕を置いて行って旅行に行くんだか……はあ……」

僕はため息をつけながらも学校の準備をした。

そして朝ご飯を食べ、歯磨きをして顔を洗って、トイレに行って、制服に着替えて、忘れ物がないか確認して準備完了だ。

「行ってくるか。」

優太は自分の家を出て、鍵を閉めた。

「彩がいなくてこんなに変わるもんなんだな。……なんか彩がいなくてなんか寂しい。」

そういえばまだ教えてない所があった。

僕は橋丘高校の2年生で2年B組だ。

特技は……ない。得意教科もない。……ひでえな。

そして僕は電車に乗り、5本目の駅で降りた。

「この光景も見慣れたもんだな。」

と思つてると向こうの方から誰か来た

「優太君！」

「ん？ おう綾音。」

彼女は『今崎 綾音（いまさき あやね）』同じクラスで学校で唯一無二の友達。決して付き合つてはない。本当だからな!!

「彩ちゃんとはどう?」

「別に普通だよ。」

そうそう綾音は僕と彩が付き合ってるのを知ってる。だって自分から言ったもの。

「仕事とか大丈夫?」

「大丈夫じゃない時はようあるけどな。」

「そうなんだね……でも幸せでしょ?」

「うんまあ。」

確かに幸せ。だって彩がいるもの。

「そろそろ学校に着くよ。」

「分かってるよ。だって高2だから知ってるよ。」

「確かにw」

学校に着いた

「宮村さん、今崎さん、おはようございます。」

「おはようございます。」

橋丘高校の校長先生。『村西 立尾（むらにし たちお）』先輩。

「相変わらずお二人は学校に着くのが早いですね。」

「僕は遅刻したくないんです。」

「同じくです。」

「君たちは偉い!」

そう言つて僕と綾音は学校に入った。

一方彩は……

「丸山さん、今回は勉強に必死ですね。」

そう話すのは氷川紗夜。Roseliaのギターをしている。Pastel*Palettesのギター担当の氷川日菜の双子の姉である。

つまり日菜は妹である。Roseliaのボーカルをしてる友希那に聞いた話によると、紗夜と日菜は双子なのに性格が違うらしい。

日菜は1回見たやつはすぐ覚えて、すぐできるようになる。それに対し紗夜は自分が先に初めたギターを後から初めた日菜に簡単に同じレベルまでにすぐ上達した。『せめてギターだけは……』って紗夜は思つてたらしい……。日菜に抜かれないようにレベルの高いRoseliaに紗夜は入つたらしい。

でも今では紗夜と日菜の関係は昔よりかは良くなつてきて、紗夜は『ギターをする意味が変わつた』らしい。

ちなみに紗夜は花咲川女子学園の風紀委員をしている。

話しが長くなつてしまったな。本編に戻ろう。

「今回はちよつとやばいから必死なんだよ！」

「なるほど。あと宮村さんとはどうです？」

「とても幸せだよ！優太君カッコイイし、優しいし、頼りになるし、いつも傍に居るよ！」

「本当に幸せなんですね。羨ましいです。」

「紗夜ちゃんにもきつと来るよ！」

「ちよ、そんなこといきなり言わないでくださいよ／＼／＼」

「（照れる紗夜ちゃん可愛い……／＼／＼）」

それから昼休み……

「ふぁ……」

「ん？丸山さん眠いんですか？」

「眠くはないよ。ただ疲れちゃって……」

「まあよく頑張つてましたもんね。」

「うん……あ、そうだ！優太君にLINEしないと！」

一方優太は……

「ん？彩からだ。『優太君今電話できる？』か……。そうだな……。『ちよつとだけなら
できるよ。』つと。」

花女

「来た！ えっと……『ちよつとだけならできるよ。』分かった！」

橋丘

「お、彩から電話だ。早いな。もしもし。」

『もしもし優太君？』

「彩、どうした？」

『優太君の声……聞きたくなっちゃって……／／／』

「そういうことね。……それだけ？」

『う、うん……／／／』

「……彩らしいな。」

『ちよつとどういう意味!?!』

「ごめんごめんww」

『もおー。』

「本当にごめん……」

『まあ優太君だから許すよ♪』

「よかった……」

それから5分ぐらい電話をした。

ちよつとだけではないな。

「それじゃあ切るね。」

『分かった！ それじゃあね♪』

優太は彩との通話を切った。

「そろそろ弁当でも開けましょうかね。」

「優太君のご飯美味しそう♪」

「まあ全部僕が作ったんだけどね。」

「そっか優太君のお母さんとお父さんは旅行に行ってるんだったよな……寂しくないの？」

「……めちやくちや寂しいよ……」(涙)

「そりや寂しいね……でも彩ちゃんがいるからいいんでしょ？」

「まあね。彩がいるから何でもありだけどね。」

「そういや僕も勉強しないといけないんだった。完全に忘れた。やばいどうしよう。」

「そういえば綾音は得意な教科つてあるの？」

「私は国語かな。なんか面白いじゃん？」

「え？ 面白い？」

「だって新しいこと知れるし、将来役に立つこと多いじゃん？」

「言われてみれば確かに……」

「だから国語なんだよ。」

「そうなんだね……」

綾音の得意な教科って国語だったのか……初めて知った……そういや彩の得意な教科ってなんだろう……帰る時間聞いてみるか。

3話 言いたいこと

その日の放課後

「ふう……疲れた……」

「優太君お疲れ様♪」

綾音は相変わらず優しいな。

「綾音は疲れてないの？」

「私は疲れてないよ♪ 今日国語あったからとても楽しかったんだよ！」

授業が楽しいとか綾音すごいな……

自分の得意な教科があるから楽しいって……綾音すごいでしょ……

「そういえば彩ちゃんと付き合ってるんだよね？」

「うん。」

「どうなの？」

「どうなのって？」

「幸せかなくって」

「幸せだよ。てか彩がいない生活とか考えられないし。」

「それほどの存在なんだね。」

綾音からしたら本当に羨ましいんだよね……なんかごめん

「今日も彩ちゃんと一緒に帰るの?」

「うん。」

「ラブラブだね♡」

「や、やめろよ／＼／＼」

「優太君可愛い♡」

すると綾音は僕に抱きついてきた。おい!? 僕は彩と付き合ってるんだぞ!? こんな姿を彩に見られたら絶対泣くし怒られるよ!!

「あ、綾音……? なんで抱きついてきたの……?」

「だって優太君が可愛かったからだだよ♡」

僕は綾音にも抱きつかれたのか…… ここは学校だから彩は絶対見てるわけないけどさすがに……ね?

「彩が見てる所で抱きついたらダメだからね。」

「分かってるよ♪」

「そーいや綾音と彩を直接出会わせたことないな。ん? じゃあなんで綾音は僕と彩が付き合ってるのが知ってるかって?」

それは僕が彩の写真を見てたら綾音に見つかって見られたからだ。

「そろそろ彩が待つてる時間かもしれないから帰るね。」

「分かった。また明日ね♪」

「ああ、綾音またな。」

そう言つて僕も綾音は手を振つて別れた

「(彩に綾音が抱きついてきたことを言わないようにしよう。あと綾音の前で顔を赤くしないようにしよう。)」

優太はそれに注意することにした。

優太は駅についた。

「彩は……」

「ん？ 優太君！」

そう言つて彩は僕に思いつてきり抱きついてきた。

「彩待った？」

「全然待つてないよ！」

「分かった。そういう朝から言つてたけど『言いたいこと』つて何？」

僕は今日1日中気になってた。彩から『言いたいこと』を言うのは本当に珍しいことなのだ。僕は本当に気になって気になって今日授業に集中できなかつたのだ。

「そうだね…… それじゃあ言おうかな……／＼／＼」

すると彩の顔がいきなり赤くなり始めた。どうしたんだ？ いきなり顔を赤くして

……？

「今度の土曜日さ……わ、私と……デートしない……？」

「あ、なるほど。そういうことだったんだ。……て、えくく!!」

彩から来た言葉はなんと『デート』だった！

マジか…… 彩とは付き合ってるけどデートはあんまりしてないからまだ慣れてな

いんだよね……

「あ、彩？ いきなりどうしたの？」

「優太君とデートがしたくて……／＼／＼」

「それは嬉しいけど…… でも僕達まだ全然慣れてないよ……？」

「それでも優太君とデートがしたいの！」

「ご、ごめん…… 分かった。デートしようか。」

「ありがとう優太君！大好き！」ムギユー♡

そういつて彩は僕に抱きついてきた。ちよつと彩!?! 一応人もいるんだし!?! 周り

を気にしようよ!?!

「彩……そういうのは家でしようよ……」

「ここじゃダメなの……?」ウルウル

そんな声と顔をしないでくれ……僕はそういう声と顔に弱いんだ……断るに断れないじゃないか……なんて最強の武器を持っている子なんだ……

「いいけど、周りに人がたくさんいたら絶対ダメ。少なかつたらいいけどさ。」

「分かった! 優太君との約束絶対守るね!」

「納得できたらよかつたよ。」ナデナデ

頭を撫でると彩は笑顔になった。なんて可愛いやつだお前はよ。

「でもどこに行くの?」

「水族館だよ! 水族館デート!」

「ちよそんな大きな声で言わないでよ……// //」

「ご、ごめんね……?」ウルウル

だーかーらそんな声と顔をしないでくれよ……

「いいよ。」

「ありがとう! 優太君私のこと好きでしょ?」

「何当たり前のことを言わせてるんだよ。全く。」

デートが楽しみだわ

4話 水族館デート 前編

次の日

「今日は水族館デートか……」

前にも言ったがデートはあんまりしていないから緊張している。慣れてないんだよなあ……

「だ、大丈夫かな……」

そんな不安を抱えながら僕は準備をした

一方彩は……

丸山家

「……」

彩はぐつすり眠っている

ブウーツブウーツ

「ん？ 優太君からだ…… もしもし？」

『もしもし彩？』

「もしもし優太君？ どうしたの？」

『彩、寝起きか？』

「うん。そうだけど……」

……え？

『彩、今日なんの日か知ってるの？』

「え？ ……あ！今日デートの日じゃん！」

『全く……彩らしいな。』

優太） こういうのホントクソ可愛いんだよなあ。

『それじゃあ後でな。』

「うん！」

優太） そう言つて僕は彩と通話を切つた。心配だあ……

宮村家

「よし、準備はできた。それじゃあ行こう。」

僕はそう言つて家を出た

集合場所である公園についた

「あれ？ 彩がいない？」

一方彩は……

丸山家

「優太君どの服がいいかなあ〜？」

「お姉ちゃん優太さんとの約束の時間過ぎてるよ！」

「え？ あ！ ホントじゃん！」

私は妹に怒られました……

「全くお姉ちゃんは……」

「ごめん（汗）」

私は急いで着替えて集合場所である公園に行きました

優太視点

「ん？ あれは……彩か。」

「優太君ごめんね……待たせて……」

「僕も今来た所だよ。それじゃあ行こっか。」

「うん！」

そして僕と彩は水族館に行きました。

「優太君♪ 久しぶりのデートだね♡」

「うん。本当に久しぶりだね。」

「私ドキドキしてきちゃった／＼／＼」

「大丈夫だよ。彩は僕が守るからね。」

「ありがとう優太君♡」

電車に乗りました。

「優太君隣に座ろ♪」

「いいよ。」

彩は僕の隣に座りました。

「あ、彩。そんなにくつつかなくても……」

「優太君とこうやってくつつきたいの♡」

「そ、そうか…… 彩がいいならいつか。」

僕は彩にくつつきながら水族館へ行きました。

そして電車から降りました。

「それじゃあ行こっ♡」

「うん。」

そう言つて僕と彩は水族館へ行きました。

「確か…… あつたよ!」

「あれか。」

「優太君はやくはやくー♪」

「分かったからそんなに慌てんなって。」

デートするとなんかいつもより彩が早くなり元気になる。

「早くお魚さんに会いたいなあ♪」

彩って高2なのに魚のこと『お魚さん』って言うんだ……バチくそ可愛いじゃねーか

……

「それじゃあ入ろっか。」

「うん♡」

そして僕は彩はチケットを買って水族館に入りました。

「うわあ〜可愛いー♡」

「ああ。（お前の方がめちやくちや可愛いぞ。）」

「こっちのお魚さんも可愛い♡」

「だな。（だからお前の方が可愛いんだよ。）」

ホント彩って可愛いんだよなあ。

「彩はどの魚が可愛い?」

「え!? それじゃあ全部だよ!」

「あ、全部なんだ。」

「そうだよ!」

「そ、そんなに怒らなくても……」

「え？ 別に怒ってるわけじゃないよ？」

「あ、そんなんだね。ごめん。」

「え？ なんで謝ってるの？」

「彩を怒らせたから……」

「謝らなくていいよ。優太君のこと大好きだから♡」

そう言つて彩は僕に抱きついてきた。ちよつと彩!?! 人がいるんだよ!?! 周りの目を考えようよ! // //

「どうしたの優太君？ さつきから顔赤いけど……」

赤くした犯人は君だよ彩く……

「い、いやなんでもないよ。」

よかつたあ怒つてなくて。

「そう言う優太君はどの魚が好きなの？」

「僕も全部だよ。」

「ほら優太君も全部!」

「確かに……」

結局全部の魚が好きになるんだけどね。

まあ彩のことが大好きだけだね。

「優太君このお魚さん見て♪私みたい♪」

「確かに似てるね。」

「くつついてるし、イチャイチャしてるね♡」

「確かに……ってイチャイチャしてるって……自分から言ってるけど、すごいことだよ。」

「そうかなあ……／／／」

「そうだよ……」

「まあ本当にイチャイチャしてるからな♪」

「まあ言い返せないな。」

確かに僕と彩は本当にイチャイチャしてるからなんとも言えないんだけどね。てか自分で言う所でもないんだけどね。

「優太君♡」

「何?」

「今日はデートだよ?もつとイチャイチャしよ♡」

「そうだったね。イチャイチャしよつか。」

ホント自分で言うことじゃないけどね。

するとある何かにぶつかった

5話 水族館デート 後編

すると何かにぶつかった。

「ん？」

「ママ？」

「どうしたのこんな所で？」

「ママじゃない……」グスツ

「ママ？ 私はママじゃないよ。もしかして迷子？」

「多分迷子だね。」

「それじゃあお姉さんとお兄さんとお母さんが来るまで一緒に待とうか。」

「うん……」

その瞬間、彩がお姉さんに見えた……

多分……5歳か6歳かな。

「お姉ちゃんとお兄ちゃんはどういう関係なの？」

「え、えつとね……付き合ってるの！」

「ちよ彩!？」

そんな子供に言ったら……

「お姉ちゃんとお兄ちゃん付き合ってたんだ。」

「う、うん。」

彩がその男の子の頭を撫でた。

なんか自分達の子供みたいだな。

「鍊（れん）！」

「ん？ ママ！」

その男の子はお母さんに抱きつきました

「うちの鍊がすみません……」

「大丈夫ですよ。迷惑はかけてないので。」

「本当にすみません…… ほら鍊も。」

「はい。お姉ちゃん、お兄ちゃん本当にごめんなさい。」

「いいよ。お母さん来てよかったね。」 ナデナデ

と彩は鍊の頭を撫でた

「それじゃあね。」

僕と彩は鍊に手を振った。もちろん鍊は僕と彩に手を振った。

「なんかいきなりだったね……私、緊張してた……あはは……」

「確かにな。小さい子供を相手にするの僕も苦手。」

「私も……でも小さい子供ってとても可愛いよね♪」

「確かにな。」

でも彩の方が何百倍も可愛いけどね。

「それじゃあ優太君！お魚さん見よ！」

「うん。見よつか。」

そして僕と彩は水族館の魚を改めて見ることになった。本当に魚って素晴らしい生き物だね。

「優太君！私とお魚さん、どっちが好き？」

「そんなの彩一択に決まってるよ。」

「もうやめてよ優太君／＼／」

彩の照れる顔がとても可愛かった。

いやだって『お魚さん』って言ったら彩絶対泣くし、僕のこと嫌いなるからな。

「ありがとう優太君♪」

「いやいや、当然のことをしたまでだよ。」

彩を悲しませたらダメだからね。絶対。

「彩は可愛いからね。」

「もうやめてよ／＼／」

「その照れてる姿も可愛いよ。」

「ちよつと優太君つたら／＼／本当に優太君は私を照れさせるのが上手な男だよね／

／」

本当に彩は可愛いなあ。彩は他の男に絶対渡さない。彩は僕の彼女。僕が彩を大切に
にするんだ。

「彩は僕のこと好き？」

「どうしたのいきなり？ 私は好きに決まってるよ！ 優太君を嫌いになるわけないじゃ
ん！ 優太君は私の彼女♪ 私は優太君彼女♪ 嫌いになるわけないんだよ♪」

「彩…… 本当にお前は可愛いし偉いな。」 ナデナデ

「も、もう……／＼／」

これはガチで可愛い。彩は本当に可愛いなあ。もうこれは他の男に渡せなくなるいな。
こんな日々を他の男に渡してたまるか。彩は僕の人だぞ。

「優太君？ どうしたの？」

「い、いや、なんでもないよ。」

「そ、そう？ ならいいけど……」

彩、ちよつと心配してる……？ 心配させちゃったかな。聞いてみるか。

「彩……もしかして心配してる？」

「心配……？ まあ心配してるかな……さつきから優太君、私の方をずっと見てるから……」

なるほど、そういうことか

「えつとね、彩は誰にも渡さないって決めたんだよ。」

「誰にも渡さない？」

「うん。彩は本当に可愛いから他の男の絶対渡さないんだよ。彩は僕の彼女だからね。」

「優太君……／＼／＼うん、私も優太君を他の女に絶対渡さないよ！ 私は優太君のこと大好きだからね！」

そう言つて彩は僕に思いつきり抱きついてきた。

「ちよ彩！ 周りに人いるよ／＼／」

「それでもいいんだよ！ 私は優太君のこと大好きだから！ 『宮村優太君は私の人』つてのを周りの女子に見せるの！」

「それはそれで周りの女子に申し訳ないな……」

「それでもいいの！ 優太君は私の人だからね！」

「分かつた分かつた……」

本当に周りの女子に申し訳ない。みんな彼氏や彼女がほしいのに、そんなことを僕と

彩が見せつけるのって本当に申し訳ない……周りの女子本当にごめん。

「優太君？」

「あ、ごめんごめん。」

「もう、また私の方見てたよ。」

「本当にごめん……」

「いいんだよ！ 優太君のことなら気にしないから！」

そう言つて彩はまた抱きついてきた。

「あ、彩また！」

「えへへ／＼／＼」

照れてる顔マジで可愛い……ホント彩を彼女にして正解だったな。こんな可愛い彼女が出来たもん……大切にしよう。

「見てあのお魚さん♪可愛く泳いでる♪」

「ホント可愛くな。彩は泳げるの？」

「……泳げない。」

「別に大丈夫だよ。絶対泳げるとは限らないからね。」

そーういや彩が泳いでる姿見たことないな……

「ほらほら優太くん！」

「彩、ゆつくり見よ……」

それから僕と彩はお魚さんを見た。本当に可愛く泳いでる可愛いお魚さんもいたよ。そしてお土産コーナーにきた。

「パスパレのみんなに何かお土産上げよ！」

「いいよ。上げよつか。」

「千聖ちゃんはこれかな？」

そう言つて彩が見せたのは可愛い黄色のペンキン。

「絶対いいよ。千聖さん喜ぶよ。」

「分かったー！イヴちゃんはこれかな？」

彩が見せたのは可愛い紫のペンキの。

そして日菜、麻弥と来たが……まさかの全部ペンキン。彩らしいな。

「あ、花音ちゃんにはこのクラゲを上げよう！」

「そつか、花音はクラゲが好きだったね。」

そして僕と彩はお店を買った。もちろん僕と彩で割り勘した。お金は無事足りた。帰る時、彩はとてご機嫌がよかった。本当に可愛いなあ。